

慶應義塾に関連した出版物や教職員の最新著書などを中心に、本に関する情報をお届けします。

英語での「考え方」を知ると 英会話はスムーズになる

『英語の思考法』

―話すための文法・文化レッスン―

井上逸兵（文学部教授） 著
ちくま新書／946円（2021年7月）



言語はコミュニケーションツールだが、同時に人間が考えるために欠かせない道具でもある。日本語で考えることと、英語で考えることは、別の体験なのだ。義務教育で英語を勉強しているにもかかわらず、スムーズに英語が話せるようにならないのも、英語特有の思考法を身につけていないからと言えるだろう。「独立」「つながり」「対等」をキーワードに、さまざまな場面における英語独特のコミュニケーション法を具体例とともに徹底解説。日本人が意外と分かっていない「You」「Would」「Why」の使い方や考え方など、従来の英文法の本とはひと味違った解説で目を開かれる人も多いだろう。

教職員執筆の最新刊

●足立修一（理工学部教授） 著

『制御工学のこころ―古典制御編』

東京電機大学出版局／3300円（2021年4月）

●田村次朗（法学部教授） 著

『競争法におけるカルテル規制の再構築―日米比較を中心として』

慶應義塾大学出版会／4180円（2021年6月）

●白井裕子（政策・メディア研究科准教授） 著

『森林で日本は蘇る―林業の瓦解を食い止めよ』

新潮新書／792円（2021年6月）

●高橋伸夫（法学部教授） 著

『中国共産党の歴史』慶應義塾大学出版会／2970円（2021年7月）

●松尾弘（法務研究科教授） 著

『物権法改正を読む―令和3年民法・不動産登記法改正等のポイント』

慶應義塾大学出版会／2420円（2021年8月）

●中尾知彦（文学部准教授） 著

『アーツ・マネジメントの基本』

慶應義塾大学出版会／770円（2021年9月）

慶應義塾の1冊

『明治十四年の政変』

久保田哲著

インターナショナル新書／1012円（2021年2月）



明治14年の政変とは、国会開設時期などをめぐり伊藤博文らと対立した大隈重信とその一派が政府から追放された事件のこと。明治11年、明治政府の中心人物だった大久保利通が暗殺されると、日本の舵取り役は大隈、伊藤、井上馨、黒田清隆ら次世代に託された。議会開設、憲法制定、貨幣制度などの「国のかたち」を作るプロセスで各人の思惑が絡み合い、やがて発展していく。本書には大隈との協力関係がうかがわれる福澤諭吉も登場するなど、「複雑怪奇」と呼ばれる政変の経緯と謎をダイナミックに説明する一冊である。